

普賢品六箇の大事

第一 普賢菩薩の事 文句の十に云はく「^{かんぼつ}勸発とは^{れんぼう}恋法の辞なり」云云。

御義口伝に云はく、勸発とは、勸は化他、発は自行なり。普は諸法実相の迹門不變真如の理なり、賢は智慧の事なり、本門隨縁真如の智なり。然る間^{あいだ}經の末に来たつて本迹二門を恋法し玉へり。所詮^{いま}今日蓮等の類南無妙法蓮華經と唱へ奉る者は普賢菩薩の守護なり云云。

第二 若^{にやくほ}法華^{けきょう}經^{ぎょうえん}行^ぶ閻浮提^{だいい}の事

御義口伝に云はく、此の法華經を閻浮提に行ぜんは普賢菩薩の威神の力に依るなり。此の經の広宣流布することは普賢菩薩の守護成るべきなり云云。

第三 八万四千^{てんによ}天女の事

御義口伝に云はく、八万四千の^{じんろうもん}塵勞門なり。是即ち煩惱即菩提・生死即涅槃なり。七宝の^{かんむり}冠とは頭上の七穴なり。今日蓮等の類南無妙法蓮華經と唱へ奉る者は是なり云云。

第四 是人^{せにんみょうじゅう}命終^{いせんぶつじゆしゅ}為千仏授手の事

御義口伝に云はく、法華不信の人は命終して地獄に墮在すべし。經に云はく「^{にやくにん}若人^{ふしん}不信、^{きぼうしきょう}毀謗此經、^{そくだんいっさい}即断一切、^{せけんぶつじゅ}世間仏種」の文^{これ}是なり。法華經の行者は命終して成仏すべし。是人命終^{これ}為千仏授手の文是なり。千仏は千如の法門なり。謗法の人には獄卒迎へに来たり、法華經の行者は千仏迎へに来たるなり。今日蓮等の類南無妙法蓮華經と唱へ奉る者は千仏の迎へ疑ひ無きなり。

第五 閻浮提内^{えんぶだいない}広令流布^{こうりょうるふ}の事

御義口伝に云はく、此の内^{なんえんぶだいい}の字は東西北の三方を嫌へる文なり。広令流布とは法華經は南閻浮提計りに流布すべしと云ふ^{これ}經文なり。此の内^{これ}の字之を案ずべし。今日蓮等の類南無妙法蓮華經と唱へ奉る者は深く之を思ふべきなり云云。

第六 此人^{しにんふく}不久^{とうけいどうじょう}当詣道場の事

御義口伝に云はく、此人とは法華經の行者なり。法華經を持ち奉る處を当詣道場と云ふなり。此^{ここ}を去つて彼^{かしこ}へ行^かくには非ざるなり。道場とは十界の衆生の住處を云ふなり。今日蓮等の類南無妙法蓮華經と唱へ奉る者の住處は山谷曠野^{せんごくこうや}皆寂光土なり。此を道場と云ふなり。「此の^{あらた}因易むること無きが故に^{じきし}直至と云ふ」の^{これ}積之を思ふべし。此の品の時最上第一の相伝あり。釈尊八箇年の法華經を八字に留めて末代の衆生に譲り玉ふなり。

「当^{まさ}に起^たって遠く迎ふべきこと当に仏を敬^{いた}ふが如くすべし」の文是なり。此の文に迄^{いた}って經は終はるなり。当の字は未来なり。当起遠迎とは必ず仏の如く法華經の行者を敬^{いた}ふべしと云ふ經文なり。法師品には「此の經卷に於て敬^みひ視ること仏の如くす」と云へり。八年の御說法の口開きは南無妙法蓮華經方便品の諸仏智慧にして、終はりは当起遠迎当如敬^{いた}ふの八字なり。但此の八字を以て法華一部の要路とせり。されば文句の十に云はく「当起遠迎当如敬^{いた}ふよりは其の信者の功德を結することを述するなり」と。法華一部は信の一字を以て本とせり云云。

尋ねて云はく、法華經に於て序品には首^{はじめ}に如の字を置き、終はりの普賢品には去の字を置く。羅什三蔵の表事の法門心地如何なるぞや。答へて云はく、今經の法体は実相と久遠の二義を以て正体とするなり。始めの如の字は実相を表し、終はりの去の字は久遠を表するなり。其の故は実相は理なり、久遠は事なり、理は空の義なり、空は如の義なり。之に依って如をば理空に配当するなり。釈に云はく「如は不異に名づく。即ち空の義なり」と。久遠は事なり。其の故は本門寿量の心は事円の三千を以て正意とするなり。而るに去は久遠に当たるなり。去は開の義、如は合の義なり。開は分別の心なり。合は無分別の意なり。此の開合を生仏に配当する時、合は仏界、開は衆生なり。序品の始めに如の字を顯はしたるは生仏不二の義を顯はしたるなり。迹門は不二の分なり。不變真如なる故なり。此の如是我聞の如をば不變真如の如と習ふなり。空仮中の三諦には、如は空、是は中、我聞は仮諦、迹門は空を面とする故に不二の上^にの而^に二なり。而る間而^に二の義を顯はず時、同聞衆を別に列ぬるなり。さて本門の終はりの去は隨縁真如にして而^に二の分なり。仍^よって去の字を置くなり。作礼而去^{さら}の去は隨縁真如の如と約束するなり。本門は而^に二の上の不二なり。而^に二不二常同常別古今法爾^{ほうに}の釈^{これ}之を思ふべし。此の去の字は彼の五千起去の去と習ふなり。其の故は五千とは五住の煩惱と相伝する間、五住の煩惱が己心の仏を礼して去ると云ふ義なり。如去の二字は生死の二法なり。傳教の云はく、「去は無來の如來・無去の円去等」云云。如の字は一切法^{これ}是心の義、去の字は只心^{これ}は一切法の義なり。一切法是心は迹門の不變真如なり。只心は一切法は本門の隨縁真如なり。然る間法界を一心に縮むるは如の義なり。法界を開くは去の義なり。三諦三觀の口訣相承と意同じ云云

一義に云はく、如は実なり去は相なり、実^{しんじゆ}は心王、相は心數なり。又諸法は去なり、実相は如なり。今經の一部の始終諸法実相の四字に習ふとは是なり。釈に云はく「今經は何を以て体とするや。諸法実相を以て体と為す」と。今一重立ち入って日蓮が修行に

配当する時、如とは如説修行の如なり。其の故は結要^{けつちよう}五字の付嘱を宣べ玉ふ時、宝塔品に事起こり、声徹^{しょうてつ げ ほう}下方し、近令^{ごんりよう}有在^{うざい}遠令^{おんりよう}有在^{うざい}と云ひて、有在の二字を以て本化迹化の付嘱を宣ぶるなり。仍って本門の密序と習ふなり。さて二仏並^{びようざ}座^{ふんじん}し、分身の諸仏集まって是好良薬^{ぜ こうろうやく}の妙法蓮華経を説き顕はし、釈尊十種の神力を現じて四句に結し、上行菩薩に付嘱し玉ふ時、其の付嘱とは妙法の首題なり。総別の付嘱、塔中^{たっちゅうとう}塔外^げ之^{これ}を思ふべし。之に依って涌出・寿量に事顕はれ、神力・嘱累に事^お竟はるなり。此の妙法等の五字を末法^{びやくほう}白法^{おんもつ}隱没の時、上行菩薩御出世有って五種の修行の中には四種を略して但受持の一行にして成仏すべしと経文に^{まのあた}親^まり之在り。夫とは神力品に云はく「於我滅^{お が めつ}度^ど後^ご、応受持^{おうじゆじ}斯^し経^{きよう}、是人^{ぜ にん}於^の仏道^{ぶつどう}、決定^{けつじよう}無^む有^う疑^ぎ」云云。此の文明白なり。仍って此の文をば仏の廻向^{え こう}の文と習ふなり。されば此の経を受持し奉る心地は如説修行の如なり。此の如の心地に妙法等の五字を受持し奉り、南無妙法蓮華経と唱へ奉れば、忽ちに無明煩惱の病を悉く去って、妙覺極果^{はだえ}の^{みが}膚^みを瑩^みく事を顕はす故に、さて去の字を終はりに結すなり。仍って上に受持仏語と説くなり。煩惱悪覺の魔王も諸法実相の光に照らされて一心一念遍於法界と觀達するなり。然る間還って己心の仏果を礼する間、作礼而去とは説き玉ふ。「彼々三千互遍亦爾」の釈之を思ふべし。秘すべし秘すべし、唯授一人の相承なり、口外すべからず。然れば此の去の字は^ふ去^こ而^に去^この去と相伝するを以て至極とするなり云云。